保育士として海外へ挑戦。
シリアへの想いを胸に「国際協力」で生きる。

保育士の西村さんが赴任したのは、シリアの幼稚園。派遣中は「遊びを通した学び」の導入に取り組みました。現地の人との絆も生まれ順調に活動していましたが、シリアで内戦が勃発したため、任期終了となり帰国。

現在はNPOのスタッフとしてアジアの子どもたちの教育や目立支援を行っています。協力隊への参加でどのようなことを感じ、そして当時の経験は現在の仕事にどのように結びついているのでしょうか。参加前に抱いていた思いから、現在のお仕事まで、詳しく伺います。

保育士として参加したいと、
青年海外協力隊にチャレンジ。

保育士として働き始めて３年が経った頃、「このままずっと働いていていいのかな」と漠然と思うようになりました。今後の人生に向けて自分を見つめ直すために、今までとは違う環境を経験したくなったんです。そんな中、中学生の頃に憧れていた青年海外協力隊のことが頭に浮かび、募集説明会へ。保育士の資格と経験を生かそうと、幼児教育の職種で受験しました。結果は不合格。二次の面接で、私と同じような応募者の方々と顔を合わせる機会があったのですが、話を聞くとみんな目的意識をもった素敵な人たちで、「私も協力隊の一員になってこの人たちのように活動したい」と強く感じ、2年後に再受験を決意。二度目は絶対に合格したいという思いから、英語力に磨きをかけたり、幼児教育の勉強会にも積極的に参加。二度目の挑戦で、無事に合格しました。

派遣国に決まったのはシリア。中東という地域にはあまり良いイメージがなく、正直不安もありました。家族や友人にも「大丈夫？」と心配されましたが、派遣前訓練で仲間と励まし合いながらアラビア語の特訓を行ったほか、現地での安全管理や中東の文化などを学ぶなかで、不安も少しずつ和らいでいきました。

▲ シリアの幼稚園の様子

勉強中心だったシリアの幼稚園に
「遊びを通した学び」を導入。

シリアでの赴任先は、タルトゥース県の幼稚園でした。私はタルトゥース県に初めて派遣された協力隊員でしたが、他県での先輩隊員のこれまでの活動実績が広く知られていたこともあり、比較的スムースに受け入れてもらいました。また、私の不安を取り除いてくれたのがシリア人の同僚の存在です。実は彼女はJICAが行う幼児教育研修に参加していたことがあり、私は派遣前に彼女に会いに行ったことがありました。現場の責任者でもあった彼女が、いつも共に考え、そして励ましてくれたことが私の心の支えになりました。

私が派遣された目的は、日本の幼稚園で実践されている「遊びを通した学び」の導入です。シリアの幼稚園では、子どもたちは園園したら帰るまでずっと机に座って勉強しています。「幼稚園は、小学校入学までに勉強させるところ」という意識が強く、遊びの中から学んだり、自分で考えさせたりという教育は根付いておらず、今まさに取り組もうという動きが出てきたところでした。

そこでまず取り組んだのが、アルカーンと呼ばれる「遊びの部屋」を作ることでした。「遊びの部屋」で、絵本やままごと道具、ブロックなどで遊ぶことを通して、子どもたちが友達と積極的に関わったり、ものを作ることに興味を持ったりと、受け身ではなく自ら進んで学ぶことの楽しさ、大切さを伝えようと思ったのです。

ただ、新しい考え方がすぐに理解してもらえるわけもなく、現場の先生の反応が冷ややかな時も。なかなか思いが伝わらず悩んでいる時に、私とシリアの先生方の橋渡しをしてくれたのが日本へ研修にも来ていた同僚でした。アラビア語の拙い私に代わって「遊びを通した学び」の意義や効果をていねいに伝えてくれたのです。彼女のフォローにも助けられ、着任１年後には「遊びの部屋」が完成。子どもたちは、みんな大喜びでした。

子どもたちは週２回の「遊びの部屋」での時間を心待ちにしてくれ、「今日は『遊びの部屋』で遊べる？」と聞かれることもしばしば。当初は懐疑的だった先生方も、工夫して遊んだり、自分たちで考えながら友達と関わる子どもたちの姿を見て『遊びの部屋』の必要性を認めてくれるようになりました。また先生たち自身も子どもたちと同じ目線で遊んだり、ふれあうことで、子どもたちの新しい側面を見つけることができたのではないかと思っています。私が帰国した今でも、嬉しいことにこの幼稚園では「遊びの部屋」を活用してくれているんです。

いつしかシリアの人たちと
家族のような関係に。

先生方は、仕事を離れても、食事に招いてくれたり、家族ぐるみで付き合ってくれました。特に日本で研修を受けた同僚は、日常の些細なことでも気にかけてくれて、いつも温かく優しく見守ってくれる私にとってお母さんのような存在。心と心の交流を重ねることで、シリアの人たちと家族のような絆が生まれていきました。派遣前に抱いていたシリアのイメージは大きく変わり、シリアの人たちが大好きになっていったのです。

シリアの良さをもっとたくさんの人に知ってもらおうと始めたのが、日本の幼稚園との交流です。ビデオレターや絵を交換したり、お互いの国について学ぶ機会を設けることで、子どもたち同士が楽しく交流できるよう、心がけました。そうすることで、子どもたちにも、私と同じように、相手の国への偏った情報やイメージを変えて、相手を身近に感じ、好きになってくれればと思ったのです。この交流の中で、シリアの園長先生が「友だち―日本とシリアは手を取り合う仲間―」と書いてくれました。園長先生に私の気持ちが伝わり、そして仲間と認めてくれていることに、胸がいっぱいになりました。

▲ 教育向けの講習会にて

内戦勃発に伴う帰国．帰国後は、
短期ボランティアとしてヨルダンへ。

ところが、シリアでの内戦の勃発により、任期を２カ月残して帰国することになりました。家族のように思っていた人々との突然の別れは、私にとっては簡単には受け入れられないことで、胸が張り裂けるような思いで帰国しました。

帰国後は、国内で保育士として再び働き始めましたが、家族同様に生活していた人たちを置いて帰国したことが心残りでモヤモヤとした日々を送っていました。さらに、帰国後もシリアの情勢が悪化する一方だったことから、何かできることはないかとも考えていました。そのときに、JICAのヨルダンでのシリア難民支援の活動を知り、半年間の支援活動に参加することに。行く前は「自分が大好きだったシリアの人々の全く違った姿を見ることになるのでは？」という不安も強く、迷いもありましたが、シリアのために何かしたいという気持ちを抑えられず、仕事をやめてヨルダンに向かったのです。

ヨルダンでは、難民になっても変わらず温かいシリアの人たちに触れることができました。また1度目の幼児教育支援の時はタルトゥースという限られた地域での関わりでしたが、2度目の難民支援ではシリアのあらゆる地域から避難してきている人に接することができ、１度目の活動だけでは見えなかったシリアを知ることができました。自分の目で見ることの重要性も改めて感じ、行って良かったと思っています。

活動テーマは、シリアと幼児教育。
いずれはシリアの復興支援に携わりたい。

青年海外協力隊での経験を通して、それまで漠然としたイメージしか持っていなかったシリアが、実はとても素朴で温かい国であることを知りました。そうして自分が感じたシリアの良さを多くの人に伝えたい、そのために国際協力の仕事がしたいと考えるようになったのです。

そこで、ヨルダンでボランティア活動をした後は、シリア難民支援をしているNPO法人に職を得て、１年ほどイラクに滞在しながら活動。イラクから帰国した後は、アジアの子どもたちの教育や目立支援を行うNPO法人のスタッフとして日本で働いています。国際協力の分野でも、これまで携わってきた幼児教育の経験を生かしたいと思ったからです。

一方で異なる国や地域の状況を知る中で、また新しい価値観も学んでいけたらと感じています。将来的には、シリアの復興支援に参加したいとも考えています。現地で復興支援が始まったときには少しでも早く駆けつけられるよう、現在の仕事を通じて、語学やマネジメント、さらに広報などのスキルを磨いていくつもりです。

JICAボランティアで得たもの

異なる環境に身を置き、前に向かって行動することの大切さに気づく

私は青年海外協力隊を経験して、自分自身が大きく変わったのを感じています。一番の変化は、目標に向かって前に進む気持ちを持てたこと。それまでの私は、どこか自分自身に制限をかけてしまうことがありましたが、協力隊に参加して、行動したからこそ得られる喜びを実感することができました。シリアでは「遊びを通じた学びの大切さ」を伝えることに苦労しましたが、考え方や価値観の違いを超えて分かりあえた時の嬉しさは、格別なものがあります。これからも未来を担う子どもたちのために、そしてシリアの復興のために役に立つ存在になれるよう、幅広い経験を積んでいきたいと思います。

これからJICAボランティアを目指すみなさんへのメッセージ

受験を決めた時から、新しい出会いが待っています！

迷っているなら、ぜひ一歩を踏み出すことをお勧めします！
ボランティアとしての派遣先での経験はもちろん、受験することで自体も大きなきっかけや転機になります。
私の場合は、受験を決めたときから、それまでは触れることのなかった情報に接したり、
これまでの人生では出会わなかった人たちと出会ったりと、たくさんの刺激を受けました。一歩を踏み出した先には、
見たことのない世界が広がっています。ぜひ新しい世界にチャレンジしてみてください。